



日暮れも早くなり、秋から冬の季節となってきましたね。今年インフルエンザウィルスの流行についても気になるところです。

今回は予防のためのワクチンに関する内容を集めてお届けします。

## 【予防接種の歴史】

予防接種の歴史は、イギリスの医学者エドワード・ジェンナーが1796年に天然痘(てんねんとう)に対する牛痘種痘法(ぎゅうとう



しゅうとうほう)を発見したことに始まります。

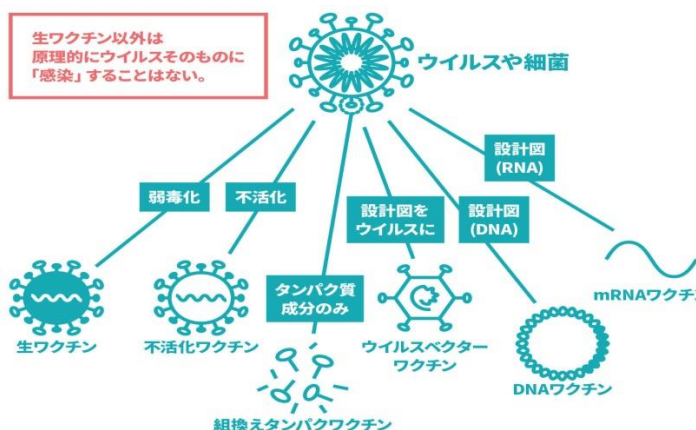
ある日、ジェンナーはウシの乳しぼりをしている人から、「牛痘(ぎゅうとう)にかかった人は、天然痘(てんねんとう)にはかからない」という話を聞きました。

この話をヒントに、ジェンナーは天然痘の研究に取り組み、ウシやブタで実験をくり返しおこないました。そしてついに「種痘(しゅうとう)」を完成させ、仮説が正しいことを証明したのです。

体には、ウイルスなどの異物が入ってくると、抗体(こうたい)という物質をつくり出して追い出そうとする力があります。この力を免疫(めんえき)と言い、一度抗体ができれば同じ病気にかからなくなります。ジェンナーは、この仕組みを利用しました。

天然痘ほど危険ではない「牛痘(ウシがかかる天然痘)」にかかった人のウミを、まだ天然痘にかかっていない人にわざと注射して、天然痘の抗体をつくるという方法です。その結果、本物の天然痘にかからずにすむようになりました。

## 【主なワクチンの種類】



## ・生ワクチン

病原性を弱めた病原体からできています。

接種すると、その病気に自然にかかった場合とほぼ同じ免疫力がつくことが期待できます。

## ・不活化ワクチン、組換えタンパクワクチン

感染力をなくした病原体や、病原体を構成するタンパク質からできています。1回接種しただけでは必要な免疫を獲得・維持できないため、一般に複数回の接種が必要です。

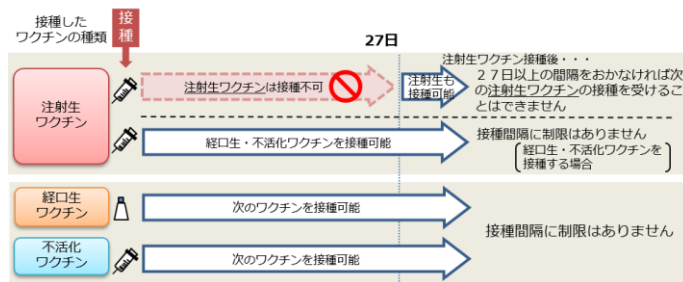
## ・mRNA(メッセンジャーRNA)ワクチン、DNA ワクチン、ウイルスベクターワクチン

ウイルスを構成するタンパク質の遺伝情報を投与します。その遺伝情報をもとに、体内でウイルスのタンパク質を作り、そのタンパク質に対する抗体が作られることで免疫を獲得します。今回、新型コロナウイルスの表面にあるタンパク質に対するワクチンが国内外で承認を受け、日本でも接種が開始されています。

## 【異なる種類のワクチンを接種する間隔】

令和2年10月1日から、異なるワクチンの接種間隔について、注射生ワクチンどうしを接種する場合は27日以上あける制限は維持しつつ、その他のワクチンの組み合わせについては、一律の日数制限は設けないことになりました。

<令和2年10月1日からの「異なる種類のワクチンを接種する際の接種間隔のルール」>



● 接種から数日間は、発熱や接種部位の腫脹(はれ)などが出る場合があります。ルール上接種が可能な期間であっても、必ず発熱や接種部位の腫脹(はれ)がないこと、体調が良いことを確認し、かかりつけ医に相談の上接種を受けてください。

参照: 日本製薬工業協会 HP、厚生労働省 HP

作成 牡丹山薬局